

中海の自然

中海は日本で5番目に大きい湖で、淡水と海水が出会う場所に出来た汽水湖です。となりの宍道湖とは大橋川でつながっており、両方合わせると日本一の汽水域になります。中海の水位は海面とほぼ同じため、潮の満ち引きに応じて美保湾の海水が境水道を通じて出入りしています。重たい海の海水は湖の底をほうように入り込み、軽い川の水は表面を流れるため、湖水の上と下とは環境が全く異なります。湖の水は1年の半分程度は酸素が欠乏し、生物が生きていくにはとても厳しい環境です。

中海・宍道湖の概要

	宍道湖	中海
面積	79.16km ²	86.79km ² **
平均水深	4.5m	5.4m
最大水深	6.4m	8.4m
年間降水量	1761mm	1761mm
集水面積	1318km ²	595.2km ² **
平均水位	H.P. +0.4m	H.P. +0.3m
貯水量	3.6億m ³	5.2億m ³
湖岸線延長	47.3km	104.6km**
流入河川数	26	18
自然護岸(比)	10.9%	10.8%
半人工護岸(比)	13.3%	4.0%
人工護岸(比)	74.2%	84.0%

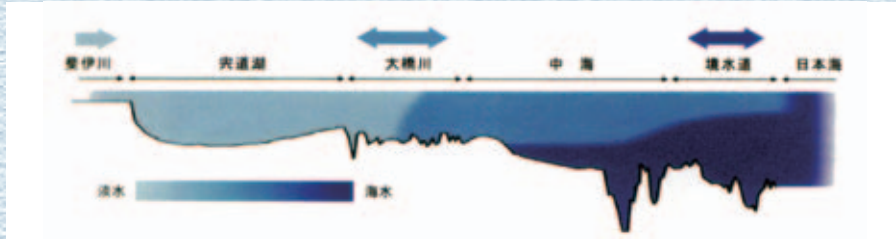
環境庁「第4回自然環境保全基礎調査(1994)」に基づく
降水量はH4~H13年の流域平均降水量
最大水深には人工的窪地は含まない
*湖沼水質保全計画に基づく指定湖沼面積は92.1km²
**湖沼調査保全計画に基づく指定地域面積

中海自然再生マップ

中海の自然再生の目標

昭和30年代前半(1955~1960年)までの中海では、多くの市民が魚釣りや水泳、貸しボートなどで遊ぶ姿がいたるところで見られました。また、海水と淡水が出会う汽水環境の豊かな漁場が人々の生活を支え、岸辺に繁茂する海藻や海草は「もばとり船」で刈り取られ、有機肥料として沿岸の畑で使われていました。

中海で目指す自然再生は、昭和20年代後半から30年代前半の「豊かで遊べるきれいな中海」であり、沿岸の生活と調和した汽水環境と生態系を取り戻すことです。



中海・宍道湖の水塊断面-日本海から海水が湖底をほうようにくさび状に入ってくる



コハクチョウ



ヘラサギ(左)とクロツラヘラサギ(右)

しかし、浅いところには多くの生き物が育ち、2005年には宍道湖と一緒にラムサール条約に重要な湿地として登録されました。中海には毎年約40,000羽のカモが飛来し、なかでもスズガモ、キンクロハジロ、コハクチョウはそれぞれ全生息数の1%以上の個体が中海で冬を過ごしています。また、ときには珍しいヘラサギの仲間もやってくるがあります。



浜に打ち上げられたオゴノリ

水生植物でも絶滅危惧種のリュウノヒゲモ、カワツルモ、オオクグなどの群落が沿岸河口部に見られます。また、放置され汚染の原因とされたオゴノリなどの海藻類も、積極的に回収し、かつてのように食材や肥料として利用することで、環境改善と有用資源の両面で期待されています。



マハゼ(ゴズ)



サルボウガイ(アカガイ)



ウナギ



マガキ

魚介類ではマハゼ(ゴズ)やウナギ、サルボウガイ(赤貝)などは中海の味として昔から全国に知られていました。環境悪化などにより昭和30年代頃から漁業は急速に衰退しましたが、浅場を造成し、かつての自然を再生することによって、今後は地域の生活を支える重要な産業として復活することが可能となります。



島根半島上空から中海東部・米子湾方面

右手前に貯木場、森山堤防を挟んで本庄水域。画面中央は江島、その右手が大根島。江島の左手弓ヶ浜半島との間には中浦水門が見えます。現在は撤去されて江島大橋が架かっています。画面左手奥は米子湾。(2001年10月撮影)



昭和24年頃の米子・出山水泳場

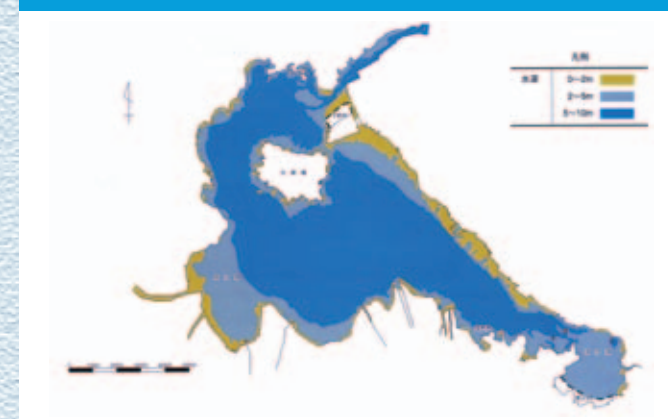


中海で行われていた藻刈り(昭和16年頃)

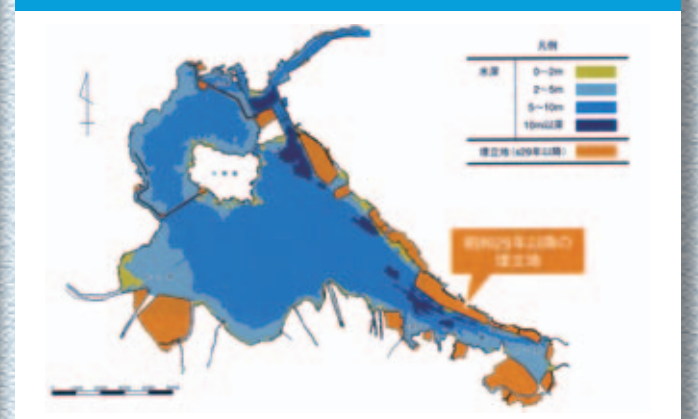


子供らによる貝採り

昭和29(1954)年の湖底地形



現在の湖底地形



中海自然再生協議会では、人びとが中海とともに豊かに生きてきた頃の自然を可能な限り再生し、それを子々孫々にまで確実に伝えていきたいと願う沿岸住民を中心に、関連する省庁、自治体、大学、NPOなどが集まり、自然再生推進法に沿って中海の自然を蘇らせるための論議を重ねてきました。平成20年度には「中海自然再生全体構想」をまとめ、現在、それを実現するための具体的な実施計画を検討しています。〔「中海自然再生全体構想」は中海自然再生協議会のホームページ <http://nakaumi-saisei.sakura.ne.jp/> からダウンロードできます。〕

中海自然再生全体構想



中海の自然再生は人と自然が共生する豊かな湖の再生を目指しています

発行: NPO法人自然再生センター
〒690-0064
島根県松江市天神町28 島根大学白湯サロン内
TEL(0852)21-4882 FAX(0852)61-0900
E-mail: jim@sizen-saisei.org

中海自然再生マップ



アマモ・コアマモ場再生



中海にまだわずかに自生しているアマモ・コアマモを増やし、魚の産卵や仔魚の隠れ場をつくります。

海藻回収とその利用



中海で回収した海藻は乾燥した後、食料や肥料として利用します。利用すれば資源ですが、利用されない海藻は腐って湖の汚濁源になります。

浅場の造成



干拓工事で失った浅場を造成し、海藻草の生育や魚介類の生息に適した場の創生が国土交通省などによって進められています。

子ども環境学習



中海の自然再生では将来を担う子どもが中海に親しむ機会を多く作ることを目標としています。水鳥公園では環境省と一緒に子どもパークレンジャー事業を行いました。

森山堤防一部開削



森山堤防の一部が開削され、本庄水域との水の交換と船の航行が可能になりました。

砂浜保全



飯梨川河口の砂浜や浅場を保全し、環境と生態系を守る学習や研究の場として活用しつつ、中海沿岸環境再生のためのヒントを探ります。

河川敷の再生



雑草や竹が生い茂り荒地化した飯梨川河川敷を牧草地として整備し、野鳥が集まる河畔林と棲み分けをします。

浚渫窪地の環境修復



ヘドロが溜まりやすい浚渫跡の窪地を無害な素材で埋め立て、栄養塩の溶出や硫化水素の発生を封じ込めます。

親水空間創出

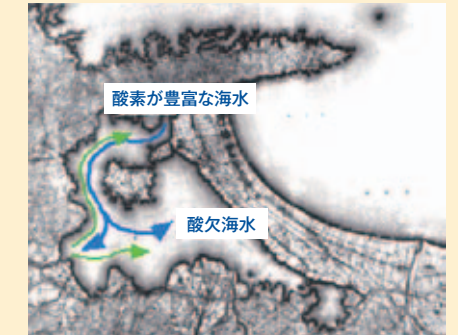


浚渫汚泥処理地には絶滅危惧種に指定されている昆虫や水生植物が沢山生息しています。これらの保護を図りながら、人も親しめる水辺の利用を考えます。

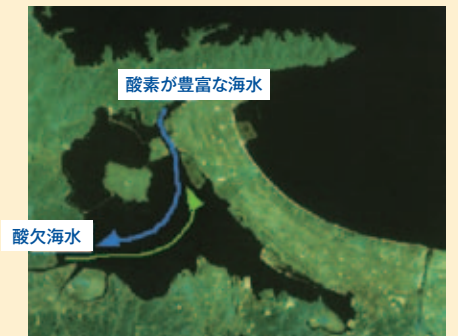
中海環境を大きく変えた干拓・淡水化事業

中海干拓事業は戦後の食糧難を解決する目的で計画され、周辺農地への灌漑用水確保のための淡水化計画と合体して1968年から本格的な工事が開始されました。1983年までには干拓堤防や水門など基本的な工事は終了しましたが、その間の社会変化により、干拓までして水田を作る必要性が薄れ、淡水化による水環境の悪化も懸念されるようになりました。1996年には最大で最後の干拓予定地であった本庄水域の干陸化が進められようとしたが、住民の強い反対運動などを受けて2000年に政治的判断で事業の中止が決定されました。2009年には森山堤防の一部が開削され、中海干拓・淡水化に関わる事業は終了しました。しかし、この事業に関わる一連の工事によって、中海は大規模な地形改変が行われたため、海水と淡水の水の流れが大きく変わり、沿岸では多くの浅場が失われ、湖底には約800万m²に及ぶと言われる浚渫窪地が残されてしまいました。

1968年以前



1981年以降



→ 表層水(大橋川=斐伊川などから流入する淡水・低塩分水)
← 底層水(日本海から流入する海水。含まれている酸素は湖底のヘドロを分解するため急速に消費される)

干拓工事が始まる1968年以前と本庄水域を閉め切る森山堤防や大海崎堤防が完成した1981年以降では、流入する海水の経路が大きく変わりました。もとの流れに戻そうと、2009年に森山堤防の一部が開削されましたが、まだその効果は現れていません。